

東北地方南部の様相

白鳥良一

1

東北地方の奈良・平安時代の遺跡から出土する土器には、土師器、須恵器、須恵系土器、施釉陶器（緑釉・灰釉）、磁器（青磁・白磁）瓦器質土器がある。これらのうち、当地方で生産された土器は土師器、須恵器、須恵系土器の三者である。東北地方全域をみた場合、各々の土器の特徴および共伴関係には若干の地域性が認められ、一律に論じるにはやや無理がある。ここでは東北地方南部を中心とした地域における土器の様相について述べる。

2

従来、この地域における奈良・平安時代の土器の編年的研究は、土師器、須恵器、須恵系土器についてそれぞれ個別に進められて来た。まず従来の成果にもとずいて各々の土器を概観しておきたい。

【土師器】奈良・平安期の土師器については昭和32年に氏家和典氏により型式設定がなされ、その後、氏をはじめ多くの研究者による検討を経て、現在では国分寺下層式→表杉ノ入式といった編年が一般化している。

国分寺下層式の土師器はすべて非ロクロ調整のものである。杯類は体部外面をヘラミガキ、底部をヘラケズリした丸底気味のもので、体部と底部の境付近には軽い段や沈線のめぐるものが多い。内面はすべてヘラミガキ・黒色処理されており、中には内外両面をヘラミガキ・黒色処理したものもみられる。

表杉ノ入式の土師器では杯類がすべてロクロ調整されている点に大きな特徴がある。器形はすべて平底で、底部から口縁部にかけて外傾しながら直線的に立上がる単純なものが多い。ロクロからの切離しは大部分が糸切りで、切離しの後、体部下端や底部に手持ちヘラ

ケズリや回転ヘラケズリが施されているものもある。内面はすべてヘラミガキ・黒色処理されており、内外両面がヘラミガキ・黒色処理されているものもある。甕には非ロクロ調整のものとロクロ調整のものと両者が存在し、まれに内面を黒色処理した小型の甕もみられる。

一方、最近になっていくつかの遺跡では、非ロクロ調整の杯類とロクロ調整の杯類が共伴して出土する例が認められるようになり、こういった土器群が国分寺下層式と表杉ノ入式の過渡期に位置付けられるのではないかとする指摘もある。

【須恵器】東北地方南部におけるこれまでの須恵器窯の発掘例は約15遺跡以上にのぼる。須恵器の編年的研究には岡田茂弘・桑原滋郎両氏が杯形土器を分類し編年したものがある。これによると、古代の須恵器杯は9類に分類され、一般的にみてそれらは、切離し技法では静止糸切り・ヘラ切りのものから糸切りのものへ、調整技法では切離し後にヘラケズリ調整を行なう段階から調整を行なわない段階へ、形態的には口径に対する底径の比の大きいものから小さいものへという変遷が認められることなどが判明している。

【須恵系土器】須恵系土器とはすべてロクロ調整され、ロクロからの切離し後は再調整を全く受けずに酸化焰焼成された土器で、焼成温度は1,000℃～1,100℃ほどと推定され、一種の窯が用いられたと考えられている。土器の硬度は土師器と須恵器の中間値を示し、色調は赤褐色や明褐色を呈す。須恵系土器は、ヘラミガキや黒色処理などの再調整を全く受けなかったこと、窯で焼かれたと推定されることなどの点で土師器とは異なり、またすべてが

酸化焙焼成され赤褐色を呈することなどでは須恵器とも区別される。器種には、杯、高台杯、小皿、台付皿、三足付皿、片口椀、鉢、甕などがある。

須恵系土器についての研究は宮城県多賀城跡調査研究所および岡田茂弘氏、桑原滋郎氏によって進められて来た。その結果、須恵系土器は杯、高台杯、小皿、台付皿を主要な器種とし、それらは杯、高台杯を中心とする組成から、これに小皿、台付皿が加わる組成へと変遷していることなどが明らかにされている。

3

最近、筆者は多賀城跡から出土した古代の土器について、おもに土師器、須恵器、須恵系土器の三者の共伴関係を中心に観察し、その変遷と年代を検討した。その結果、多賀城跡の土器は三者の共伴関係からみてA～Fの6群に分類でき、それらはA群→B群→C群→D群→E群→F群と変遷していることが判明した。各群の特徴は以下のとおりである。

【A群土器】土師器の杯類が非ロクロ調整のものだけで構成され、須恵器の杯類がヘラ切りのものを主体とし、須恵系土器を全く含まない土器群。

【B群土器】土師器の杯類が非ロクロ調整とロクロ調整のもの両方で構成され、須恵器の杯類がヘラ切りのものを主体とし、須恵系土器を全く含まない土器群。

【C群土器】土師器の杯類がすべてロクロ調整のものだけで構成され、須恵器の杯類がヘラ切りのものを主体とし、須恵系土器を全く含まない土器群。灰釉陶器を共伴することがある。

【D群土器】土師器の杯類がすべてロクロ調整のものだけで構成され、須恵器の杯類が糸切りのものを主体とし、須恵系土器を全く含まない土器群。灰釉陶器を共伴することがある。

【E群土器】土師器の杯類がすべてロクロ調整

のものだけで構成され、須恵系土器が杯類に限られる土器群。須恵器の杯類は共伴する場合とほとんど共伴しない場合とがある。前者の場合でも量的には少なく、多くは糸切りのものを主体としている。灰釉陶器、緑釉陶器を共伴することがある。

【F群土器】土師器の杯類がすべてロクロ調整のもので、須恵系土器が杯類と小皿類の両方で構成される土器群。須恵器の杯類はきわめて少なく、全く共伴しない場合もある。共伴する場合は糸切りのものを主体としている。この土器群には灰釉陶器、緑釉陶器が共伴するものが比較的多い。また瓦器質土器が伴なう場合もある。

各土器群の層位関係は以下の通りである。

調査	土器群	A群土器	B群土器	C群土器	D群土器	E群土器	F群土器
第14次調査(大畑)				SI 360 → SI 361			黒褐色土層
第15次調査(鴻の池)	第8層			→第7層		第6・5層	→第4層
第20次調査(田屋場)				第6層		→第4層	→第2層
第21次調査(金瓶)				SK531 → SK530			砂質褐色土

土器群の層位関係

B群土器については他の土器群との層位関係を把握することはできなかったが、土器群の特徴からみてA群土器とC群土器の間に位置づけられることはほぼ間違いない。

土器群の年代についてはおもに文献史料で造営年代などが明確な城柵跡や寺院跡における土器との比較で検討した。その結果、各土器群のおおよその存続年代は次表のように推定された。

4

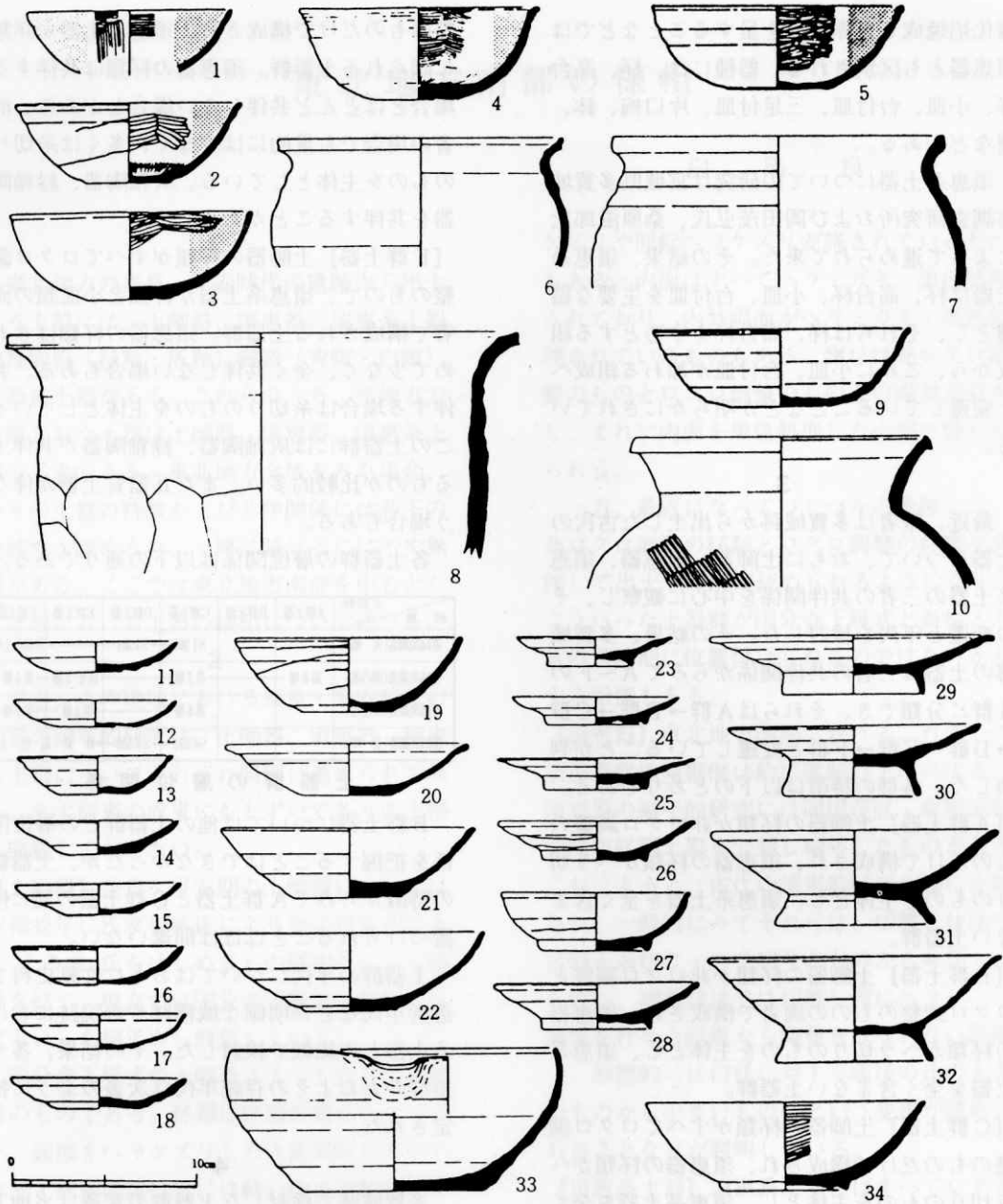
多賀城跡で検討した土器群の変遷は当地方の集落遺跡などにおける土器変遷ともほぼ一致している。そこで最後に各土器群と、共伴する施釉陶器との関係を集落遺跡の例も含めて整理しておく。

【A群土器・B群土器】共伴例なし。

【C群土器】

灰釉長頸瓶(1)―多賀城跡SK981土壇

―黒笹78号窯式に類似(N)



1	土師器	杯	SE674井戸跡	内外向面黒色処理	20	須恵系土器	杯	第20次第2層	糸切り無調整
2・3	土師器	杯	SE674井戸跡	糸切り無調整	22	須恵系土器	杯	SE317井戸跡	糸切り無調整
4	土師器	杯	第15次第4層	糸切り無調整	23	須恵系土器	台付皿	SE317井戸跡	糸切り
5	土師器	杯	SK1092土壇跡	糸切り無調整	24	須恵系土器	台付皿	SE331井戸跡	糸切り
6	土師器	甕	SE317井戸跡	ロクロ調整	25	須恵系土器	台付皿	第14次黒褐色土	糸切り
7	土師器	甕	SE674井戸跡	ロクロ調整	26-28	須恵系土器	台付皿	SE674井戸跡	糸切り
8	土師器	甕	SE316井戸跡	ロクロ調整	29	須恵系土器	高台杯	第20次第2層	
9	須恵器	杯	SK1092土壇跡	糸切り+手持ちヘラズリ	30	須恵系土器	高台杯	SE317井戸跡	
10	須恵器	甕	SE674井戸跡	中型甕	31	須恵系土器	高台杯	SE674井戸跡	
11・12	須恵系土器	小皿	SE331井戸跡	糸切り無調整	32	須恵系土器	高台杯	第14次黒褐色土	
13-18	須恵系土器	小皿	SE317井戸跡	糸切り無調整	33	須恵系土器	片口鉢	SE316井戸跡	
19・21	須恵系土器	杯	SE674井戸跡	糸切り無調整	34	瓦器質土器	台付椀	SE316井戸跡	いぶし焼き

第1図 F 群 土 器

《発表》

宮城県多賀城跡調査研究所の白鳥でございます。早速報告に入らせて頂きます。

東北地方では、奈良・平安時代の遺跡から出土する土器として、土師器、須恵器、須恵系土器、緑釉・灰釉などの施釉陶器、青磁・白磁などの磁器類、瓦器質土器といったものがあります。これらのうち、東北地方で生産された土器は、土師器、須恵器、須恵系土器の三者です。東北地方全域を対象としてみた場合、各々の土器の特徴、およびその共伴関係には若干の地域性が認められます。従って、これを一律に取り上げて論ずることは、やや困難かと思われまます。私に対するテーマは、東北地方の土器の様相ということであったわけですが、こういった事情がありますので、ここでは、東北地方の南部、主に宮城・福島の場合を中心として、その様相を述べることに致します。又、編年や年代を考える上で、どうしても奈良時代の土器との関連が出てきますので、これも含めてご報告したいと思ひます。従来の東北地方南部における奈良・平安時代の土器の編年的な研究をみますと、土師器・須恵器・須恵系土器をそれぞれ個別に取り上げた研究が主流を占めております。そこで最初に、これらの成果によって、それぞれの土器の概観をしたいと思ひます。

まず土師器についてですけれども、奈良・平安時代の土師器については、昭和32年に、氏家典氏によって形式設定がなされております。その後、氏家氏をはじめとして、多くの研究者により、いろいろな検討がなされており、現在では、この時期の土師器は、国分寺下層式から表杉ノ入式へといったような編年が一般化しております。国分寺下層式の土師器の特徴について簡単に述べてみますと、まず、これらの土師器はすべて非轆轤調整、すなわち、土器の製作に際して一切轆轤を用いていないものでございます。杯類は、体部外面をへう削りした丸底気味のもので、体部と底部の境付近には軽い段や沈線のめぐるものが多くみられます。内面はすべてがへう磨き黒色処理されておりました、その中には内面だけでなく、外面もへう磨き黒色処理した土器もあります。甕についてみますと、長胴形の甕と体部が楕円形をなす甕との2種類がございますが、やはり杯と同じように底部に軽い段や沈線のめぐるものが多くみられます。甕の底部は円盤形を成すものが多く、その中には底部外面に木葉痕のつくものが比較的多いようです。

次に、表杉ノ入式土器の特徴について述べてみます。この表杉ノ入式の土師器では、杯類一杯、高台杯を含めますが一が、巻き上げ成形の後に、すべて轆轤調整されている点に大きな特徴がございます。器形はすべて平底で、底部から口縁部にかけて単純に立ち上るものが多くみられます。轆轤からの切り離しは、大部分が糸切りで、切り離し後、削り調整をまったく受けないものが大半を占めますけれども、切り離しの後に、体部下端や底部に手持ちへう削りや回転へう削りが施されているものでございます。内面はすべてへう磨き黒色処理されております。又、国分寺下層式でみられたような、内外両面をへう磨き黒色処理したものもあります。甕では、非轆轤調整のものとの両者が存在します。ですから、甕ではすべてこの時期に轆轤調整のものになってしまうというようなものではございません。又、まれに内面を黒色処理した小型の甕も認められます。また、非轆轤調整の甕では、国分寺下層式でみられたような、底部の段や沈線が次第に消滅する傾向にあります。

以上述べたように、この地域の土師器は、国分寺下層式から表杉ノ入式という様に編年されているわけですが、これに対して、最近いくつかの遺跡で、国分寺下層式の特徴をもつ非轆轤調整の杯類と、表杉ノ入式の杯類の特徴をもつ轆轤調整の杯類の両者が共伴して出土する例がいくつ

かみられるようになっております。これは、8世紀後半に造営された城柵遺跡であります伊治城跡などで多く検出されております。従って、こういった土器群が、国分寺下層式と表杉ノ入式の過渡期に位置づけられるのではないかというようなことも考えられております。

次に須恵器について述べます。

東北地方南部におけるこれまでの須恵器窯の発掘例は、15遺跡以上に上っております。これらの須恵器の編年的な研究としては、岡田茂弘氏と桑原滋郎氏が、杯型土器を分類し、編年したものがございます。これによりますと、この地域の古代の須恵器の杯は、およそ9類に分類され、その特徴をみますと、一般的にみて、切り離し技法では、静止糸切りやヘラ切りのものから回転糸切りのものへ、調整技法では、切り離し後にヘラ削り調整を受けるものから、全く調整を受けないものへ、また形態的では、口縁部の直径に対する底部の径の比が大きいものから小さいものへ、という様に変遷するとされております。ちなみに、この口縁部と底部の径の関係をみますと、ヘラ切りでヘラ削り調整されるような杯では、口縁部の径が1に対して底部の径が、0.6～0.7ぐらいを示します。これに対して糸切りでまったく調整を受けない杯ですと、口縁部径1に対して底部の径が0.8～0.4くらいと、極めて小さくなっております。

次に須恵系土器について述べてみたいと思います。

私達が須恵系土器と呼んでおりますのは、巻き上げ成形の後に、轆轤調整され、轆轤からの切り離しは大部分が糸切りで、切離し後は、全く調整を受けずに酸化炎焼成された土器群のことです。焼成温度は、秋山隆夫氏の分析によりますと、大体1000°～1100℃ほどと推定されております。又、焼成が極めて均一で、黒斑をもつものなどがほとんどみられないことから、焼成には一種の窯が用いられたものと考えております。土器の硬さは、モースの硬度計による測定で、須恵系土器が8から4ぐらいの値をとるのに対し、土師器は2から3、須恵器は4から5というような数値が得られ、須恵系土器は土師器と須恵器の中間的な値を示すとされております。色調は赤褐色や明褐色を基調とするものが殆んどです。こういった特徴をもつ須恵系土器は、ヘラ磨きや黒色処理などの再調整をまったく受けないことや、窯で焼かれたと推定される点などから、古墳時代以降一貫してヘラ磨きされ、又、奈良時代以前からほとんどが黒色処理されるといった特徴をもつ土師器とはまったく異なるわけがございます。すべてが酸化炎焼成され、赤褐色や明褐色を基調とする色調を呈することなどでは、還元炎焼成され、灰色を基調とする須恵器とも区別されるわけです。この須恵系土器については、土師質土器とか赤褐色土器・赤焼き土器などの名前で呼ばれることもあります。こういったさまざまな名称で呼ばれている背景には若干複雑な経緯がありますが、ここではあまり詳しくふれる時間がありませんので省略致します。ただ、私達が須恵系土器という呼び方をしている主な理由は、これを須恵器の系譜をひいたものという風に認識していることによるわけですが、そうじゃなく、灰釉陶器や緑釉陶器からの器形的な影響を強く受けているのではないかという風に考えて、赤焼き土器と呼んでいる、小笠原好彦氏の見解などもあります。私達はこれを窯で焼かれたと推定されること、削りやヘラ磨きがまったく施されないという点で、土師器とは異り、技法的には須恵器に近いものと把握できること、さらに出現の状況、およびその後の出土傾向をみますと、丁度、須恵系土器が出現するころになると、還元炎焼成された須恵器の杯類が急激に減少し、消滅してしまい、その後は主に須恵系土器と土師器が共伴するというような傾向がございますので、こういった面からも、須恵器の系譜をうける、須恵器に後続する土器群という風に考え、須恵系土器と呼んでいるわけがございます。

この須恵系土器の器種には、杯・高台杯、小皿、台付皿・三足皿、片口碗、鉢、甕などがあります。須恵系土器についての研究は、宮城県多賀城跡調査研究所とか、岡田氏、桑原氏などによって進められてきたわけですが、簡単に結論からいいますと、須恵系土器は、杯・高台杯、小皿、台付皿、この4種類が主要な器種を構成し、それらは、杯と高台杯を中心とする組成のものから、それに小皿・台付皿が加わる組成へと変遷していることが明らかにされています。

以上が、土師器・須恵器・須恵系土器の概観ですが、最近私は多賀城跡から出土した古代の土器について、この土師器・須恵器・須恵系土器の3者がどういった共伴関係を持ち、どのように変遷しているのかを検討しました。その結果、結論から申しますと、多賀城跡の古代の土器は、その3者の共伴関係からみて、6つの群に分類でき、それらはA群→B群→C群→D群→E群→F群という様に変遷していることが明らかになったわけです。この辺の事情を若干お話し致します。

多賀城は、ご存知のとおり古代における陸奥国の国府の所在地でありまして、中世にも多賀国府という名で南北朝時代まで存続していた遺跡です。この調査は今年で18年目を迎えますけれども、これまでの調査で多賀城跡の遺構や堆積層から出土した一括土器群が土師器・須恵器・須恵系土器という組合せの面でどうなのかというものを、32の遺構や堆積層から出土した土器を取り上げて検討してみたわけです。その検討の観点というのは、先程、概観しましたように、土師器では国分寺下層式から伊治城などでみられるような土器組成のものへ、そして表杉ノ入式へと、3つの変遷が捉えられており、須恵器でも大雑把にみて2つぐらいの変遷が知られており、さらに須恵系土器でも大きくみると2つぐらいの変遷が把握されていることを考えまして、それらが遺構の中でどういった在り方をしているのかということに絞って検討してみたわけです。まず、6つのグループについて若干お話し致します。実は、この6つのグループそれぞれについて資料に示せばよかったです、レジュメの原稿の制限などもあって、F群土器しか図示（第1図）していませんが、ご了承いただきたいとおもいます

まずA群土器ですけれども、これは土師器の杯類が非轆轤調整のものだけで構成され、須恵器の杯類がへら切りのを主体とし、須恵系土器をまったく含まないといった土器群です。これは、土師器でいえば国分寺下層式ということになります。それからB群土器は土師器の杯類が非轆轤調整のものと轆轤調整のもの両方で構成され、須恵器の杯類がへら切りのを主体とし、須恵系土器をまったく含まない土器群ということになります。それは土師器で申しますと、先程いいました伊治城などでみられた組成ということになります。A群土器には、この32のうちの3例が入り、B群土器は2例しか認められておりません。

C群土器は、土師器の杯類がすべて轆轤調整のものだけに限られており、須恵器の杯類がへら切りのを主体とし、須恵系土器をまったく含まない土器群です。これは7例でございます。

次のD群土器は、土師器の杯類がすべて轆轤調整のもので構成され、須恵器の杯類が糸切りのを主体とし、須恵系土器をまったく含まない土器群で、これは3例あります。

E群土器は土師器の杯類がすべて轆轤調整のもので構成され、須恵系土器が杯類に限られる土器群です。須恵器の杯は共伴する場合がありますが、ほとんど共伴しないといったような例もございまして、共伴する場合は、底部は糸切りのを主体としています。これは9例でございます。

F群土器は、土師器の杯類がすべて轆轤調整のもので、須恵系土器が杯類と小皿類の両方で構成されている土器群で、須恵器の杯類は極めて少なく、まったく共存しない場合が多いようです。共存する場合は糸切りを主体としています。

各群の土器について、基準にした器種以外の特徴なども細かく述べたいのですが、時間がございませんので省略させていただきます。こういった土器群に共伴する他の土器としては、C群土器で灰釉陶器が共伴することがございます。それからD群土器ではやはり灰釉陶器を共伴することがございます。E群土器になりますと緑釉陶器・灰釉陶器の共伴例が割合多くみられるようになり、F群土器では比較的多くの遺構で緑釉・灰釉が共伴しているようです。

それから瓦器質土器といたしましたのは第1図のF群の34の土器なのですが、これは轆轤調整されており、内面及び外面の一部にへら磨きが施されて、内外ともに表面は薄い灰黒色をしております。断面は明るい灰色をなしており、燻焼がなされたと考えられるもので、轆轤調整ではありませんけれども、一応瓦器質土器という風に呼んでおります。量的にはほんの少量みられるだけでございます。

こういったA～Fの土器群が多賀城の中でこういった層位関係をもつのかということを示したのがレジュメの表（P9 土器群の層位関係）でございます。32例の一括資料のうち堆積層の層序や遺構の重複関係によって各土器群が層位的に把握された調査には、14次・15次・20次・21次の調査があります。表で見ますと、まず14次調査でC群土器→D群土器→F群土器という変遷、15次調査でA群土器→C群土器→E群土器→F群土器の変遷、20次調査ではC群土器→E群土器→F群土器という変遷、21次調査ではC群土器→D群土器→E群・F群土器といったような層序関係がわかります。これを整理するとA群→C群→D群→E群→F群という様な新旧関係が捉えられることがおわかりかとおもいます。B群土器については他の土器群との層位関係を捉えることはできないんですが、B群土器の特徴が、土師器の杯類において非轆轤調整のものが共伴するというような点にありますから、これは特徴からみてA群土器とC群土器の間に入るということは、ほぼ間違いのないものと思われまます。一応こういう操作をしましたが、必ずしも層位的な出土例が充分とはいえないものの、多賀城跡出土の土器は大勢としては、一応A群→B群→C群→D群→E群→F群というような順序で変遷していたとみていいのではないかと考えております。

次にこれらの土器群の年代について検討したいとおもいます。この土器群の年代については、主に文献資料などに、造営年代や修理などの記事が載っていて、年代を掴まえやすい城柵跡や寺院跡における土器との比較で検討したわけです。その結果をレジュメ（P11）に示したわけですが、もう少し詳しく検討してみたいと思います。

まず、A群土器からみていきます。既に述べたとおり、A群土器は、多賀城では最も古いとみられる土器群でございます。多賀城跡の調査では、確実に多賀城造営以降と考えられるような遺構から、A群土器よりも古い様相をもつような土器群がまとまって出土した例はありません。従って今のところ、この土器群は、多賀城では最も古い時期のものと考えていいと思います。従ってA群土器の上限は多賀城が創建された8世紀の前半に求めることができると思います。又、陸奥国分寺跡などでは、こういったA群土器と同じ特徴をもつ土器が、国分寺創建頃のものと思われる僧房西建物基壇の南側の溝から出土しております。国分寺の創建は、伊東信雄先生によって、国分寺建立の詔書が出された天平13（741）年から天平神護3（767）年までの間という風に考

えられております。この考え方は、国分寺跡から出土した瓦と、「天平」という記銘のある六角形の瓦製宝珠を出した黄金山神社（宮城・湧谷町）の瓦との比較から導き出されたもので、かなり妥当な見解であろうとおもわれます。従ってこのA群土器も8世紀後半頃まで存続していたと考えられるわけです。他に集落跡例で、岩手県の集落遺跡の例なんですけれども、和賀郡江釣子村の猫谷地遺跡という所では、A群とほぼ同じ特徴をもつ土師器を出す住居跡から、和同開珎のみが4枚出土しております、これも年代を考える一つの参考になろうかと思えます。

B群土器はA群土器に後続する土器です。これはA群が8世紀後半頃まで存続していると考えますと、B群の上限はこれを遡らないと思われまます。又、このB群と同じ特徴をもつ土器は、先程申しましたように、伊治城跡から出ているわけです。この伊治城跡が造営されたのは、神護景雲元年、767年ですから、これ以降に存在していたことがわかります。

次はC群についてみてゆきたいと思えます。C群と同じ特徴をもつ土器群は、岩手県の胆沢城跡の32次調査で、SD 114 溝の第3層から一括出土しております。この胆沢城跡のSD 114 という大溝は、胆沢城ではA I期という時期に考えられておまして、胆沢城創建期で最も古い段階の遺構という風にもされております。胆沢城の造営は、『日本紀略』の記事によって延暦21(802)年と推定されておりますので、SD 114 の溝跡はこれと大差のない時期と考えられます。従って、そこにはC群土器が含まれているわけですから、こういった土器群が9世紀初頭頃にはもう既にあったとみてよいかと思われまます。多賀城と胆沢城とは、やや距離が離れているわけですが、全体的にみて土師器・須恵器・須恵系土器どれをとっても非常に似たものがございまして、これを同一に考えてもいいたろうと思われまます。

D群土器については、直接に年代を決定する資料はないのですが、C群土器との主な相違点は、須恵器がへら切りを中心とするのか、糸切りを中心とするのかという違いであります。この違いというのは、岡田・桑原両氏の須恵器の編年によって、共伴する瓦などとの関係から、須恵器杯がへら切りのものから糸切りのものへ変化するのは、大体、9世紀の後半ぐらいじゃないかと考えられております。

つぎに、E群土器とF群土器について述べまます。E群土器というのは、D群土器に須恵系土器が加わった土器群でございまして。須恵系土器の出現年代を検討するのに一つの参考になるものとして、多賀城跡などでしばしば認められる灰白色の火山灰というものがございまして。これは多賀城跡だけじゃなくて、陸奥国分寺跡、多賀城廃寺跡などの官衙や寺院でみられる他、宮城県の中北部から北部にかけての多くの遺跡でも認められる特徴的な火山灰です。最近、こういった火山灰が土壌学的な立場から分析されまして、これは、宮城県北部を中心に広い地域に分布する同一墳出源の火山灰であることが明らかになっております。ところで、この火山灰は、陸奥国分寺跡でもみられるわけですが、この国分寺跡では、次の様なことがわかっております。（層序を板書する。）これは陸奥国分寺跡の塔の周辺の発掘の所見でございまして、一番下に連珠文とか宝相華文などの瓦当文をもつ軒瓦を多量に含む整地層がございまして。その上に灰白色の火山灰が乗っており、さらにその上に厚い焼土層がみられます。ところで、『日本紀略』には陸奥国分寺の七重塔が承平4(934)年、閏正月15日に雷火によって焼失したことが記されておまして、発掘所見では、この灰白色火山灰の上面に、塔の相輪の破片が直接乗っており、相輪の軸である擦管が落下した状態で発見されたことなどからこの焼土は、承平4年の雷火で焼失した時に生じたものと考えられております。このことから、この灰白色火山灰は承平4年を下限とするそれ以前のも

のということになります。一方、この下の整地層に含まれていた宝相華文や連珠文の軒瓦については、工藤雅樹氏によって検討されております。陸奥国では貞観11年に大地震がおり、官衙や寺院が大きな被害を受けたため、その翌年に陸奥国修理府というものが置かれ、大々的な官衙寺院の修復工事が行われたことが文献に見えます。工藤氏の見解によれば、連珠文や宝相華文の軒瓦はこの時に陸奥国修理府に配置された新羅の瓦工人によってもたらされたものとされております。この見解を参考にしますと、この整地層は、貞観12年以降のものということになります。さらにこの灰白色火山灰層の上に直接焼土層がのっており、その上面に相輪の破片などが落ちているというような状況を考えますと、この火山灰の降灰年代は貞観12年以降で、むしろ承平4年に近い時期、すなわち10世紀の前半ぐらいとして捉えることができます。

検討した土器群と灰白色火山灰との関係をみますと、多賀城跡では、E群土器は灰白色火山灰の下層と上層の両者にみられます。F群土器は灰白色火山灰よりも上層にしかみられません。従って、灰白色火山灰を基準にすればE群土器の年代は、およそ10世紀前半から後半頃にかけての時期、F群土器はそれ以降の時期ということになるかと思えます。F群土器の下限については今のところそれを示すような資料が乏しいのでよくわかっておりません。

以上を整理しますと、A群土器が8世紀前半から後半にかけての頃、B群土器が8世紀末頃、C群土器が9世紀前半頃、D群土器が9世紀後半頃、E群土器が10世紀前半から後半にかけての頃、F群土器が11世紀から12世紀にかけてのいずれかの時期まで、というようなことになるかと思えます。

もう、時間が来てしまいましたけれども、最後に緑釉・灰釉陶器との共伴関係を述べてみたいと思えます。

多賀城跡で検討した、このような土器の変遷というのは、この地域の集落遺跡についてもほぼ一致いたします。そこで集落遺跡の例も含めて、多賀城跡で認識された土器群と緑釉・灰釉との共伴例をみていきたいと思えます。A群土器・B群土器に共伴した灰釉陶器・緑釉陶器はまったくございません。C群土器では、多賀城跡のSK981という土壌からP11第2図1に示した灰釉長頸瓶が出ております。これは楢崎先生に以前見て貰ったことがありまして、黒笹の78号窯式に類似するが猿投産ではないだろうというご教示を得ております。D群土器では、第2図2～5に示した灰釉の瓶、椀、皿があります。2についてはこの間愛知県陶磁資料館の井上喜久男さんに見て貰ったら、黒笹78号窯式ぐらいじゃないかということでした。3の椀は黒笹90号窯式というふうに見て貰っております。4の灰釉の皿は宮城の青木遺跡の住居跡から出土したもので、これはどなたにも見て貰っていませんので、窯式ははっきりしておりません。それから5の灰釉の椀は、福島の堰下遺跡の住居跡から、D群土器に共伴して出てきたもので、黒笹90号かと思われるものです。E群土器については、第2図6～9に示したものが共伴しております。これらがどの窯式に属するかについては、私どもも直接に比定することができないので、今回全部持ってきてあります。こちらの方に見て頂いて猿投編年と対比させていきたいと思えます。F群土器もその表に示したとおりです。

時間がありませんのでここでひとつだけ問題点をあげて終りたいと思えます。それは、私が9世紀後半ぐらいに考えているD群土器に黒笹90号窯式と思われる灰釉椀が確実に共伴しているという点です。したがって、従来の猿投窯の編年に示されて来ましたが年代観とは大きな落差が生じていると言えるかと思われまます。

以上でございます。

(発表以上)

— 質疑 —

(質問—三上次男) 一つ伺ってよろしいですか。中国陶磁は出ますか。

(白鳥) 青磁・白磁は出るんですが、いずれも散発的に出土した資料で、私が設定したA～F群の土器との共伴関係を明確にできるようなものはありません。なお資料は今回全部持って来ておりますのでご教示いただければ幸いです。

(三上) あとで見せて頂きます。

(白鳥) はい、お願い致します。

(質問—氏名不明) レジュメの一番最後に京都小塩産か、と書いてありますが、どういう感じのものなのでしょうか。

(白鳥) 円盤形の蛇ノ目高台を持つ緑釉の碗です。……窯跡の比定につきましては、自信がございませんので、全部資料を持って来てございますので、見て教えて頂ければ非常に助かるわけです。

(質問—亀井明德) 九州歴史資料館の亀井でございます。こちらの資料館の方に今展示してあると思いますが、多賀城廃寺から出た緑釉の碗がありますが、それはあなたがおっしゃっているE群の土器と一緒に出るのかあるいはF群の土器と一緒に出るのかその辺をお教え頂きたい。

(白鳥) あの資料そのものについては、私が設定した土器群との共伴関係は分っておりません。実は、緑釉・灰釉とも、多賀城跡で出土している点数は大変な数にのぼるわけですが、その中でA～F群との共伴関係が明確にできるものは今のところ極めて少なく、レジュメに示した数例に限られているといった状況です。

(亀井) ありがとうございます。

(質問—福田健司) 東京都の福田という者ですが、国分寺下層式は非轆轤ということがいわれているんですけども、捉え方が違うかもわかりませんが、回転力を利用していない成形技法として捉えるということですか。

(白鳥) そうです。

(福田) 手づくねみたいなものですか。巻き上げとか、横などでか、回転力を全然使用していないという……。

(白鳥) そうです。

(福田) わかりました。